

《書 評》

ウヴェ・ペルクゼン著／糟谷啓介訳
『プラスチック・ワード ― 歴史を喪失した
ことばの蔓延 ―』藤原書店 2007

田 村 雲 供

本書は、最初ドイツ語で『Plastikwörter: Die Sprache einer internationalen Diktatur (プラスチック語：国際的独裁制のことば)』のタイトルのもとに1988年に出版されたのであるが、その後ドイツの統一やソ連邦崩壊などの時代の変化を経て、追加、削減、訂正などをほどこして出た英語版『Plastic Words. The Tyranny of a Modular Language (モジュール言語の専制)』の翻訳であるが、訳者はドイツ語版の併用も明記している。

生きた「ことば」がさまざまな姿をしめしつつ織りなす社会に、プラスチックの「レゴ・ワード」が出現したことで変質を余儀なくされていく歴史過程を意味論的に読み明かしたこの著書は、まず、プラスチック・ワードという語のイメージを喚起するため、ミュンヘンドイツ美術館内レゴ・シティの説明パネルからの引用文を扉に掲載しているので、それをつぎに記しておこう。

レゴの発展は、平らな面で接触するだけの積み木から突起物で互いに固定する積み木への移行、つまりは静態的な積み木から可動的なモデルへの移行によってもたらされた。

レゴの世界規模の成功にとって決定的となった理由のひとつは、1965年以降システムとして計画されたことにある。

―あらゆるブロックを組みあわせることができる。

―キットを補充することができる。

―幼児向けの「デュプロ」から大人向けの「テクニック・シリーズ」にいたるまで、あらゆる年齢層をカバーする材料が手にはいる。

著者はこの本を最初ドイツ語で書いたとき、本のタイトルを「レゴ・ワード、静かな独裁制の言語」にしようと思っていた。「レゴ・ブロック」のイメージを思い浮かばせるようなことばであることを示唆するためだったのだが、「レゴ」という名前は法律で保護されているというので、タイトルには使えなかったと記している。

本書全体の章分けタイトルは次のようになっている。

序 章

第一章 東西世界のプラスチック・ワード：セクシュアリティ／発展

第二章 プラスチック・ワードは新たなことばのクラスをつくるのか？

第三章 新たな現実モデルの建築材としてのプラスチック・ワード

第四章 現実製造官としてのエキスパート

第五章 日常言語の数学化

付 録 プラスチック・ワードの諸特徴

序章に次いで第一章と第二章でプラスチック・ワードの概要と特徴が記述され、第三章と四章でその使われ方と作用について、最期の第五章は日常言語の数学化現象でまとめている。なお、訳者による多くの小見出しは省略し、評者独自の見出しをつけた。

日常で普通に使われている話しことばである「日常言語」は、科学とその人工言語の世界とは区別された日常世界の共通言語である。この日常言語がせいぜい数ダースの「プラスチック・ワード」によって、どのように歪められ変化をこうむるのかをみることで、ことばの歴史的変遷と社会変化との位相を追ってみる。

序 章

序章ではまずプラスチック・ワードの概要がのべられている。

プラスチック・ワードが新しいのは、その外見ではなく使われ方においてであるとして現象をしめす。目立たない姿でいたるところに遍在しているプラスチック・ワードは、政治家の演説に、都市プランナーの製図板の上に、学会の席上に、そしてメディアにその姿を現し、ひとびとの耳目をおどろかせて世の注目を集める。しかし、やがて当たり前のものとなり日常にとけこんでしまう。そして自然そのものとおなじくらい豊かで多様であった言語の世界をモノカルチャー化していく。これを推進したのが「国民国家」である。国民国家はただひとつの言語を国民統合のシンボルとして位置づけ、標準化し、世界の画一化をおし進めた。そして第三世界の国々もまた、ヨーロッパからこの「国民的アイデンティティ」のプログラムを引きつぎ、言語の画一化をさらに進めることになる。

その変化は微妙なかたちで起こった。科学（Wissenschaft）がラテン語を捨て去り、スペイン語、イタリア語、フランス語、オランダ語、ドイツ語、スウェーデン語などの俗語を使い始めてからというもの、科学はこれらの言語に由来する概念を内部に取りこみ、変質させ新しい形に仕立てて、もとの日常言語のなかに送り返した。すると、それらの単語はまわりに大きな作用をおよぼすようになったのだという。ドイツでのこの変化は15

世紀に始まり、18世紀の60-70年代頃に終わり、18世紀の中頃には政治的、社会的概念もまた変化しはじめたことを指摘している。

「実質であることを超えて、無限の変形という観念そのものである」プラスチック・ワードは主要言語でさえも支配している。「アイデンティティ」「発展」「輸送」「近代化」「コミュニケーション」「エネルギー」「セクシュアリティ」「インフォメーション」「システム」といったプラスチック・ワードは忍び足でやってきて日常の自明性のなかに居座ってしまい、日常世界のマスターキーとなってしまふ。これらの単語は大部分が二百年、三百年前から存在しているが、その意味が一変してしまったことを著者は強調する。

近代の国民国家の形成と同時に、各国語と科学の結合が生じ、そこでプラスチック・ワードがつくり出されていった。この歴史的経過を追跡することは、現在の日常言語がいかに科学によって歪められ、しかもいかにも科学的な装いをこらした単語でできた短い文句が産業化された世界のすみずみに行き渡っているかを、つまり俗語であることばが科学の領域に移り住み、後に日常言語にもどってくるさまを歴史を見通せる対象として跡づけることである。日常言語からうまれた民衆的な概念が、科学やその他もろもろの高度な領域に移し変えられると、いつでもどこでも妥当する真理のごとき外観をまとうのだという。そして、権威づけられ聖典化されたそれらの概念が日常言語にまいもどって、支配的な神話となって日常生活に暗い影を投げかけるようになる。こうしたことが、1800年ごろ「健康」と「発展」に起こり、19世紀半ば頃には「生存競争」と「自然淘汰」に起こったのだという。

ベルクゼンが指摘しているように、この頃に啓蒙の身体化現象が顕著となり、生殖および国民の健康が国家の制度に取り込まれていく。そして、1859年にはダーウィンの『種の起源』がでる¹⁾。

見たところ共通している言語が、科学言語と日常言語というふたつの領域をつなぎとめているので、まずことばが移住しさえすれば、後で帰還するのは造作もないのだ。こうして、マルクスとフロイトの科学的教説は、日常言語を骨抜きにする教義かつ神話として日常世界によみがえることになり、しかも日常世界と日常言語への科学の浸透の度合いは飛躍的に増大し、産業化した世界のすみずみにいき渡ってしまい、擬似科学言語が日常言語を歪めてしまった。

一方、どんな形でもつくることのできるプラスチック・ワードは、産業国家をつくる基本的な建築用ブロックでもあり、プラスチック・ワードが使われるところではどこでも、あらゆるものが何にも邪魔されずになめらかに進展する態勢が整えられるのであるから、政治体制のちがいはほとんど意味がなく、普遍的記号となったプラスチック・ワードはエルベ川の向こう側の社会主義国東ドイツでも、こちら側の資本主義国西ドイツでも同じよ

うに広がってきた。しかもこの東・西両ドイツともナチの田園礼賛の牧歌を侮蔑していた反面、ナチが技術にたいしてもっていたパトスをそのまま引き継いだ。つまり両ドイツとも1930年代のアウトバーンの建設者であるナチの遺産をためらうことなく相続していたのであり、そして、エルベ川はライン川やドナウ川とおなじように産業国家ドイツの下水道となりはててしまった。こうしたことが、プラスチック・ワードの広がり軌を一にして起こったのだ、と著者はのべる。

プラスチック・ワードそれ自体が邪悪なわけではない。コンテクストに応じて意味の変わることばの伸縮性を無視して、無定形でステレオタイプな使い方が問題なのである。この言葉は暴力性を隠していて、「発展」のような単語がひとつの地域をまるごと荒廃させてしまうこともあるのだと指摘している。この指摘は、今日の日本の「地域発展」策のもろもろの状況からも理解できるものであろう。

序章の最後で、著者は形を変えて変化する「アマーバ語」とも呼ばれる「プラスチック・ワード」を定義することは可能かと問う。

プラスチック・ワードはたがいに交換可能な規格部品として使用されるので、正確さ、具体性、厳密性へと向かういかなる潜在的可能性をも失っている。これを理解するため「愛」ということばを例にだしている。愛は意味の範囲が伸縮自在で、境界は流動的である。したがって幅広い適用範囲と豊かな意味のひろがりがあり、使うたびごとに異なるニュアンスをもつことができる。こうした意味の順応性が現実の多様性を機敏にとらえるのにふさわしいことばとなっている。ところが、「コミュニケーション」や「セクシュアリティ」といったことばは、話し手から定義する力を奪ってしまっている。まさにこのことがプラスチック・ワードを認識するための第一の基準である。

したがって、つぎの第一章ではどの単語がプラスチック・ワードに属するのか、その基準を練りあげ、その意味の輪郭を描きだすことになる。それはプラスチック・ワードの実体なき姿(Phantombild)の輪郭を示すことである。

第 一 章

[実体なきプラスチック・ワード：セクシュアリティ／発展]

ベルリンの壁の崩壊以前の東西ドイツ社会からとりあげた例として、エルベ川西岸での「セクシュアリティ」(ドイツ語：Sexualität)、東岸での「発展」(Entwicklung)ということばのそれぞれの使い方を調べ、この二つのことばを抽象的なコンテクストのなかにおくと、驚くほどの類似性があることをあきらかにする。まず、セクシュアリティからみていこう。

「セクシュアリティ」

この単語が日常語のなかで使われるようになったのはここ30年ほどのことである。「セクシュアル」（ドイツ語：sexual, sexuell）という形容詞は19世紀の辞書にときおり出てくるが、「セクシュアリティ」は精神分析学がつくりあげて広めたことばであり、科学の高みから転落してきたことばであるとして、著者はフロイトと「セクシュアリティ」についての話を進める。

フロイトの「セクシュアリティ」という概念には、もともとイメージを喚起するところがあった。フロイトは「精神（Psyche）」を測定しうるものか、あるいは量として把握可能なエネルギーが内部で循環する装置のようなものと考え、精神のなかでエネルギーが分散したり、抑圧されたり、転移、増大、減少したりする一種のエネルギー分配装置とみなしていた。これは物理学から借りてきた考えである。フロイトは、自然科学は物事が実際に起こるさまを忠実に表わすと考えていたので、「精神」を自然科学の観点から解釈したのである。こうしたフロイトの著作に端を発し、19世紀の物理的エネルギーの概念に支えられたことばが日常言語のなかで使われるようになり、緊張が「蓄積」したり、「発散」したりするようになる。これらのことばの作用はますます強まり、「セクシュアリティ」は科学から借りてきた概念であるだけでなく、そこに物理的なイメージ言語が結びつき、二重の意味でメタファーとなった。

したがって、「セクシュアリティ」ということばは、日常言語や方言が意のままにしている仕草、表情、身振りのゆたかな宝庫から切り離されてしまい、そこには人間の声がかなくなかった。フロイト自身も、このことばの普遍的に認められた指標を手にしていないとのべていて、生化学のレベルで発見されるにちがいないと説明している。「セクシュアリティ」という概念にはいかなる歴史的次元も存在せず、また具体的で社会的なコンテキストを指し示すものもなく、生の歴史を自然的プロセスとして解釈したあげく、「つまるところすべては同じだ」とのべるだけである。この概念は比較的最近になってつくられた歴史的構築物だ、と著者は結論づける。

むしろ「セクシュアリティ」という概念のおかげで、それまでの人間どうしの結びつきをあらわす、友愛、友情、愛、情熱といったことばが古く時代おくれのものにされてしまい、プラスチック・ワードのひかりのもとでの日常言語は、あたかも使いふるしの観念の残骸のようにみえてくるからだと指摘し、強力なコノテーションをもつ「セクシュアリティ」は事物を指示するのではなく、アウラを輝かせ、そしてなにか肯定的なもの、所有物であるとともに基本的欲求であるような何かをほのめかすのだと。

「わたしのセクシュアリティ」、「わたしの関係」というように、わたしが何かを所有しているかのように語るなら、自分という個を普遍的なカテゴリーのもとに囲いこみ、個を

普遍的な思考の枠組みに結びつけることになる。そのとき「わたし」は、まったくことなる目的のために用意された客観的な言語によって私的領域を変形しているのであり、自分自身を科学の対象にすることによって、自分自身から疎外されるのだ。そして「わたし」はひとつの「症例」となり、その人は自分を科学に売り渡し、「わたし」はなにものかに服従していることになる。つまり、わたしたちの身体は専門家の手のうちにあることになるのだ、とペルクゼンは説く。

「セクシュアリティ」は比較的新しい概念であり、一般的な慣用にはいったのは、せいぜいここ15年か20年のことであり、1800年頃の「健康」がそうであったように、「セクシュアリティ」という概念は、語形成の領域で多産性をほこっている。性科学、性生活、性的自由、性的知識、性教育、性犯罪、性凶鑑、性的啓蒙など。

しかし、ペルクゼンは「セクシュアリティ」の意味論的分析に焦点を当てているので、「性、セックス」との関連については言及していない。しかし、「セクシュアリティ」と「セックス」についてM. フーコーはつぎのように理解している。

[M. フーコー：セクシュアリティとセックス]

西洋世界がすでに久しい以前に、愛というものを発見した時、死を受け入れ得るものにするのに十分な価値をそれに与えた。今日その等価物たろうとしているのは性（セックス・性本能）であり、しかも至上の等価物たろうとしている。しかし、その性がどのようにして性的欲望（セクシュアリティ・性行動、性的欲望の総称）というものに歴史的に従属しているかを明らかにすることだ。「身体」と「人口問題」の接点にある「性」は、生の営みのまわりに組織される権力によって中心的な標的となり、性的欲望の装置が権力の技術に、生を取り込んで用いることを可能にした。すなわち、前提となる本源的な「性」というこの想像上の要素を作り出すことで、性的欲望の装置はその最も本質的な内的機能原理の一つである性にたいする欲望を生じさせたのだ。それは「性」そのものを欲望可能なもの、欲望の対象となりうるものとして作り上げた。

したがって、この「性」が性的欲望というものに、どのようにして歴史的に従属しているかを明らかにすることがもとめられているのだが、そこでは同時代の権力の技術を出発点にして思考しなければならない。性的欲望は極めて現実的な歴史的な形象であり、それが自己の機能に必要な思弁的要素としての性という概念を生み出したのであるから、性的欲望の装置に対抗する反撃の拠点は、〈欲望である性〉ではなく身体と快楽である、とフーコーはのべている²⁾。

ペルクゼンは現象を意味論的に解釈するので、実体である身体の一部、身体そのものである「性、セックス」は考察の対象とはならない。しかし、フーコーはこの身体への権力

の介入を問題とする。つまり「セックス」と「セクシュアリティ」を分けて分析・考察することによって権力の姿が見えてくることをしめしている。性とは身体そのものであり、身体と快楽とは「性」そのものであろう。

ドイツ・ヴァイマル共和国時代の女性たちが「性・結婚相談所」を訪れたのも、性を囲む権力装置からの身体の解放であり、快楽の解放であり、性の民主化・平準化への道のりであった³⁾。同時にこの解放は消費社会の高潮化のなかで欲望の装置に取り込まれていき、欲望する性へと駆り立てられる。そこに展開するのは「セクシュアリティ」が蔓延する社会の姿であった。

ペルクセンに戻ろう。「セクシュアリティ」という語のもつ特徴は1989年以前にエルベ川の向こう側で使われていた「発展」という語に、その類似を見いだすことができるとして、著者は東へ入る。そして、東側では「発展」による「歴史」の乗っ取りが生じていたとみる。

「発展」

東ドイツにおいて「発展」が「歴史」にとって代わったことは、特定の視点から東ドイツの歴史について語ることでもある。つまり、存在しうるかぎりの無数の歴史的データを「発展」という一本の線にそろえて整列させるのであるから、そこにはプラスの肯定的な響きがある。

「発展」という語は、18世紀に日常言語から科学に採り入れられて、あらゆる分野にまたたく間に広がり、その後、新たな科学的定義をたずさえて日常言語のなかにまいもどってきた。しかも、有無をいわせぬ科学の教えの威光をもって。

上方への運動は「発展」の歴史であり、「発展」という運動に従わないあらゆるものは、絶望的なまでに後進的で時代遅れのものとされる。この発展という運動は「発展」を自動詞として、あるプロセスとして使っている。しかし、entwickeln (独)、develop (英) はもともと目的語をとる他動詞であった。1800年ごろまで自動詞的用法は存在しなかったが、この頃を境に「発展」は「行為」から「状態変化」を指すようになっていき、こうして「発展」は自然のプロセスであるかのような外観を呈することとなったのだ。

東ドイツで「発展」概念の使用を決定的にしたのには、マルクスの解釈があった。歴史は法則にしたがって進行するプロセスとして分析され、これが「自然」の世界で再解釈された。しかし、こうしたものの見方は東ドイツだけではなく、西ドイツにもあてはまるという。1986年12月初めに、化学関連企業ヘキスト社がライン川にクロロベンゼンを故意に排出していたことがわかったとき、政府の法律専門家は、これは「かなり劇的に悪化した発展」だと語ったという。企業の犯罪行為がまるで自然現象であるかのように装われ

ていた。

肯定的な響きをもち無害にみえる「発展」という語は歴史を書き替え、問題点をおおいかくし、人間の醜悪な行為をまるで自然に起こった現象であるかのように見せかけることができる。しかも「発展」は「多くの顔をもつ」ことばであり、このどうとでもとれる一般性がコンセンサスをもたらすのだと、自動詞化からくる無責任を指摘する。すなわち、自動詞化した「発展」には「歴史」を「自然化」するはたらきがあるのだ。

「発展」という語は、エルベ川の向こう側ではかつての党幹部つきの専門家たちが、エルベ川のこちら側では産業界のエリートたちが意のままに使いこなしている。そして官僚制の巨大な房がそこにぶらさがっていた。また、国際的に「発展」という語が使われるようになったのは、第二次世界大戦後ハリー・トルーマンが「発展途上」という単語をみずからの外交政策の要に据えてからであり、ドイツ語の辞書でも1940年までは見出し語に短い説明しかなく、1977年のドゥーデン辞書と1981年のブロックハウス＝ヴァーリヒ辞書を見れば、この語がいかに上昇気流に乗ったかがわかる。「発展」という語が公的地位を急速に上昇させ、内容を空洞化させていったのは比較的最近のことであると分析している。

車輪が回転するように、プロセスが自動的に進行するというわけだから、出来事が自然現象であるかのように立ち現われる。前進する発展はそれ自体で一個の人格、行為主体として立ち現われ居座る。この人目につかない文法的変化が、大きな影響力をおよぼすことになる。自動詞において歴史は発展としてまとめられたのだが、今度はそれが新たな他動詞に移行して行為主体となっていったのである。発展が発展することになるのだから、歴史的行為の空間から価値や倫理の問題が一掃された。

これらのことばはレゴ・ブロックの模型をつくるように、単純な作業で世界の新たな「モデル」を組み立てることができる。しかし、問題は単語自体ではなく、その用法が問題であり、単語そのものに烙印が押されていると考えるべきではない。プラスチック・ワードはなによりも歴史なき概念であるという著者ベルクゼンは、現代という時代に典型的に見られる特定の語の用法を明らかにしたいのだ。したがって「発展」「セクシュアリティ」「コミュニケーション」などの語の特殊な使い方を論じていくことになる。

第二章

【聴覚から視覚へ：プロセスから結果へ】

著者はまず、ニーチェが言語の病にくだした診断についてのべ、ことばの本来の姿をしめす。ニーチェは文明世界ではいたるところで言語が病んでいるという。それは、文明語

がその発生期に対応していた感情の動きから、感情と対立する思想の領域を包み込まなくてはならなくなってしまうことによって、本来のことばによる意志の疎通ができず、感情の一致を度外視した言葉と行動の面で共同のしきたりが取り決められたことによるという。歴史的に思考し、言語のひとつの歴史的断面をあらわにするニーチェは、言語が自立性を獲得し、明確な概念のなかで正しく考えることを教えてくれるに至ったのは、何世紀にもわたる言語の自己膨張があったからだとみている。

ニーチェのいうように、言語が自己膨張するのは、言語が生きているからであり、人間の歴史のなかで培われてきたからであろう。「プラスチック・ワード」はその対極にあることばである。

言語の抽象化と国家の統一のあいだには、ほぼ千年にわたって続いた中世の普遍的なラテン語書記文化の終焉があったという。したがって、ここに台頭した無定形のプラスチック・ワードは、歴史の基本概念でも科学の専門用語でもなければ、日常言語で使われる単なる抽象語でもない。日々のニュースが家庭に届ける幻影世界もプラスチック・ワードのありかたとの一連の合致点をしめしている。どちらも現実を非現実的なものとし、ある判断を隠している。それはステレオタイプとしての記述であり、事物は背後の暗闇のなかにとり残されるのだ。これは言語のもつ歴史性が背後に引き、概念は歴史を喪失してしまったことをしめしている。すなわち、視覚的記号の世界が日常言語にまで及びはじめたことを意味しているのだと説く。

ことばにも聴覚から視覚への移行という特徴がよみとれる。歴史性、すなわち時間の経過のなかで理解する聴覚から、瞬時の判断をもたらす視覚への推移のなかでプラスチック・ワードは台頭した。ことばにみるこの変化も近代に共通する趨勢であり、視覚優位はことばにもおよんだことがよみとれる³⁾。

ここで著者は、もともとラテン語から派生した語である「情報=information」という語の歴史的変化を追い、このことばが時間のなかの行為やプロセスを指す言葉（教授、調査、探求、証明など）から、結果を記述したり対象を描写したりする名詞「ニュース」へと、すなわち時間的経過の側面は消え、結果あるいは対象を指示することばへと移行していくさまを記述している。この根本的な意味変化が1970年代以降に起こったことが辞書に反映していることを示す。

こうした意味変化は、概念がサイバネティックス、情報科学、情報理論といった科学に関連づけられ、改造されて日常言語にもどったことを示している。しかも科学的認可を受け、強化され拡大されて、つまり科学のお墨付きをもらってだ。自然科学に由来する概念と日常言語に由来する概念とは根本的に別物であったが、しかし科学を経過したことによって日常言語は変質してしまった。したがって、「情報」は、科学の見せかの刻印がきざま

れるにつれ、客観化され、共振音をひびかせ、より素朴なレベルで科学的表現であるかのような外見をまとして自分の足で歩きはじめたのだという。

では、真の科学的用語との違いはどこにあるのか？

科学用語が日常言語に入ると、無定形のプラスチック・ワードとなる。しかし外見が同じであるせいでこの変化は隠されていて、外見上の同一性が科学と日常を架橋している。しかし、科学者というものは、基本的に自分の言語の主人である。研究の結果、新しい概念を導入し、必要とあらばそれに新しい名前をつけるのが科学者たる者の仕事なのである。そこで使われる語や記号は曖昧さを残さず物事を手短につたえるためのものであり、無用な意味の含みがあってはならない。まさに「万能細胞」然りである。だからこそ科学者が用いるのは省略記号であり、固有名詞であり、ギリシャ語やラテン語の単語である。これらは、できるかぎり概念を傷つけずに、自由に定義された内容と結びつくことができるのである。他方、無定形のプラスチック・ワードを使う者たちは、ことばの奴隷となりやすい。手にとって調べることができないプラスチック・ワードが備えているのは、何よりもまず社会的機能であり、「威光」である。

「スローガン」とも「たんなる抽象語」とも違うこのプラスチック・ワードの新しさは、わたしたちの日常言語の中間世界を秩序づける結節点なのである。メディアの幻影世界、そして記号へと溶解する事物の幻影世界もまた、この中間世界に類似している。それらは、プラスチック・ワードというひと握りの単語の鑄造にいそしんでいる。かつては歴史的概念であったが、いまや歴史から切り離されたプラスチック・ワードは、大衆操作の道具となり、あらたな現実の青写真をつくりだす。ひいては、現実製造実験室の実験器具となるのであると結んでいる。

プラスチック・ワードはあらたなことばのクラスを創りだしたのだ。歴史なき概念は抽象化へとほしいままに駆け進む。ニーチェの言語論は、はるかなる過去へと押しやられてしまった。

第 三 章

【言語の弛緩と流動する世界】

「プラスチック・ワード」が建築材となって、どんな新たな現実のモデルを作り出すのか、その具体例をしめしているが、ここでは詳細については立ち入らない。

まず、歴代西ドイツ首相、アデナウアー、ブランド、コールの演説の言語には頻度の差はあるもののいずれもプラスチック・ワードで構成されていることを示す。さらに東ドイツのそれも違いはないことを確かめている。ただ西ドイツでは、「計画」は社会主義用の

ことばであるとして使わず、あいまいな「構造」という語が暗黙のうちに代役を務めたという。したがって、「計画経済」は嫌われ、それにかわって「構造的政策」を進めた。ついで都市計画の言語については、並べるだけで擬似文が作れるプラスチック・ワードが並んでいる。たとえば、「問題—解決—ストラテジー」のように、プラスチック・ワードの単語列がすでにほとんど文を作っている。ジョージ・オーウェルとハンナ・アーレントが気づいていたように、政治について語っているときに、このような隠喩的な語の連続が使われると、解決すべき問題が暗黙のうちに設定されてしまう。解決のためのストラテジーが戦争であるとき、これらの語が命取りになることを指摘している。

プラスチック・ワードは並べただけで、単語がたまたま文をつくる確率は高く、プラスチック・ワードの列は意味があるように見えてくる。したがって、用途の可能性は無限になる。この単語列の結合においては、概念はあってもなくてもいい付属品、そして生気を失った文法的カテゴリーや接尾辞になりつつある。概念はその存在がほとんど気づかれなほほど、すでに日常意識の自明の要素となってしまうのだと指摘している。日本でも、そう遠くない過去に「構造改革」という単語の結合に、嵐のごとく熱狂した時代があった。

第 四 章

[エキスパートのことばが現実を作り変える]

この章では、問題をもう一つの別の視点から検討している。それはプラスチック・ワードを使って社会を拘束するプロジェクトを作り出す現実製造官としての「エキスパート」の役割である。

エキスパートとは、ある分野に精通した者のことである。ドイツ語では、エキスパート(Experte)と専門家(Fachmann)とでは意味がことなる。専門家とは結晶学者や市場調査員のように、自分の領域の内部で活躍する者のことである。この「Fachmann」の対極にあることばは「Laie」で、素人・アマチュアを意味する。それに対して、専門分野と日常言語のあいだを行ったり来たりする「エキスパート」は、知識が実践に変換される地点に立っている。したがって、専門分野と日常の世界のどちらにも固定していないため、意味がぐるぐる旋回するのだという。

科学用語が私的な日常言語に入りこむ度合いがますます強まり、かさぶたのようになってしまった科学と専門性が、わたしたちの日常言語を硬化させ、権威主義的な様相をあたえている。しかし、その専門性は表装的なものにすぎない。プラスチック・ワードと専門語が結合・混合したことばが日常言語に浸透してしまった。この例は「健康」概念にみる

ことができる。

「健康」と「病氣」をわける境界は固定したものではないという科学者の認識は忘れられる。科学の語彙とする基準では、「健康」は極大値と極小値のあいだに中間地帯として広がるのだとされていたのだが、それが日常生活にはいると固定した標準となって、予防や自己責任の名のもとに自分自身を患者にしてしまう。

プラスチック・ワードの特徴として、科学に起源をもつことばが、もとの領域から別の領域に移動することによって科学の世界と日常世界を結びつけるメタファーとなることはすでに述べた。つぎにメタファーとしてのプラスチック・ワードのとらえ方をさらに検討している。

語の転移は新しい領域を切り開くだけではなく、それをゆがめて阻害もする。メタファーによる植民地化は、言語の面でも事実の面でも社会的な世界の歪曲を意味している。とりわけ三つの領域、科学（とテクノロジー）、経済学、そして行政機関での言語は、語彙を輸出し日常世界にあらたな光をなげかける三つのイメージ供給源である。これらの「植民言語」は、たがいに浸透しあいながら、力を合わせて社会を征服する。その共通点は専門家的な表現形式である。

たとえば、「発展 (Entwicklung)」という概念は、地球上の生命、人類の歴史、宇宙全体をつかさどる法則として18世紀に発見され、科学の重要概念となった。この法則が経済学者の手にわたると、開発すべき資源となった。経済学者は地球全体を「発展＝開発」が必要なものとして定義し、「発展＝開発」を終わりのない経済的プロジェクトとみなす。するとつぎは官僚がこのプロジェクトを管理する番になる。開発の必要な場所とみなされれば、官僚はそれに意のままに処理できる言語をかぶせる。たとえば、「プロジェクト」という用語を接頭辞や接尾辞にして、他の語に貼りつけることができる（「プロジェクト始動」「プロジェクト・リーダー」「動物飼育プロジェクト」等々）。

境界をこえて単語が転移することが、現在の言語使用のもっとも顕著な特徴である。言語に注目することによって科学、経済学、行政機関でうまれたイメージが、どのようにして日常生活の微細な部分さえをも言語的に開拓し、それらを科学に適合させて植民地化するかを見て取ることができる。その際、「情報」があらゆる問題を解決するマスター・キーとなっている。こうして世界は情報システムのなかで新たに解釈され記述される。その担い手が「エキスパート」という人種である。エキスパートはプラスチック・ワードに含まれる判断を自明で疑問の余地がないものとして前提し、現在の技術が永遠に続くものと思込み、近代が永続するという想定のもとで可能性の境界を設定する。

エキスパートは長期にわたって司法の独立を切り崩してきたように、いまでは道徳的・政治的な意思決定の自立性を破壊しつつある。そもそも自然科学は、無責任性と区別でき

ないようなエートスをもっている。この自然科学がエキスパートのモデルとなっている。したがって、エキスパートは大規模なデータ調査をおこない、それが「政治的意思決定の基礎」として必要なものだと公言する。しかし実際には、自分のつくった枠組みを確認しているにすぎないのだ。データ調査とそこからえたニーズは、現在の状況とそこにみられる「トレンド」を追いかけているだけであるのだが、このデータ調査が政治にとって替わり、民主主義をお払い箱にする。原子力エネルギーは必要か？ シュヴァルツヴァルトを貫通する高速道路は？ こうした問いが周囲の状況に強いられたものとして立てられると、意思決定はますますコンピュータに任され、もはや政治家によってチェックされるプロセスはなくなってしまい、意思決定は矛盾だらけのデータの集積から発するベクトルへと還元されてしまうのだと指摘している。

[エキスパートの二項対立言語]

ついで著者は、エキスパートが使う言語を科学言語、経済学言語、行政の言語とわけて、その特徴を記述している。いずれの領域の言語も二項対立型で定義するパターンであり、「善・悪」の対を「進歩・退歩」に取り替えて自分流の価値秩序を配備したものであるという。エキスパートのもとでは科学と社会という根本的にことなる二つの領域、すなわち一方の無限に拡大する理論的・技術的知識と他方のかぎりある日常生活の世界が、メタファーによってつなぎ止められているという認識は消え去り、科学的・技術的に可能であるものは、社会的にも可能であるとみなされてしまう。経済学の分野では、「進歩」と「退歩」、「ノーマル」と「アブノーマル」のあいだに境界線をひいて普遍的スタンダードをつくりだすことで、おびたしい数の脱落者をつくりだし、「低開発」「無文字」「発展途上」として負の烙印をおす。経済学と行政は分かちがたく結びついている。エキスパートが入りこんだところでは、どこでも行政の言語が蔓延する。とりわけ健康の分野で。行政言語は健康ヘルパー、教育ヘルパー、環境ヘルパー、開発ヘルパーになんらかの社会的地位をあてがい専門化し、制度化する。行政言語の手にかかると、意図はプロジェクトとなり、プロジェクトは制度に仕立てられる。こうして言語は人間をつくるだけではなく、制度をもつくりだすことになる、と読み解いている。

エキスパートの任務がなによりもまず科学的・技術的成果を実務の世界に転送することであるとすれば、かれらが抽象語を好む理由は理解しやすくなる。抽象語はなんでも取りこむ一般性をもっているので、容易に転送でき、どんなに異なった領域をも結びつけることのできる橋であり、メタファーによる植民地化の目立たない道具でもある。さらには、「エキスパートはプロジェクトを攻略しなければならず」「つねに最前線にいる」といったように軍隊的言語とも通低する。知らず知らずのうちにエキスパートの言語には軍隊のイ

メージが刻印され、「プラスチック・ワード」と似通った特徴をもつのだという。この同語反復的な結論を、次章でプラスチック・ワードとエキスパートに共通する数学化の概念で検証している。

第 五 章

[啓蒙・思考・数学]

最後の章では、プラスチック・ワードが日常言語を「数学化」していることについて述べているのだが、プラスチック・ワードと数学はともに抽象度が高く、歴史的次元を欠いているという点で共通性がある。数学こそは、非歴史的で、時間と空間にしばられない普遍的な技術なのであるから。日常言語が数学化することによって、日常言語が正確さを増したかといえば、そうではない。プラスチック・ワードは数学のパロディーでしかないのであり、むしろ日常言語を歪めていることを指摘する。

さらに、アドルノとホルクハイマーが『啓蒙の弁証法』ですでにのべているように、「……啓蒙は思考と数学とを同一視する。それによって数学は、いわば解放され、絶対的審級に祭り上げられる。……数学的方法は、いわば思考の儀式になった」。したがって20世紀の言語学者、ソシュール、チョムスキー、オーウェルたちの新しい言語概念は、この歴史的次元を欠いた全体主義国家の言語だと批判している。

数学化された社会はコンピュータへと行きつき、日常言語も数学化からコンピュータに組み込まれた軌道に沿って変化することになる。こうして、これまで言語が人間的なやりかたで人間的なものを伝えてきた経路、すなわち経験の堆積が言語から奪われてしまった。

最後に著者ペルクゼンは、1933年シカゴで開催された万国博覧会のスローガンを掲げて、歴史はその通りに経過したことを嘆く。

「科学が発見し、技術が利用し、人間が順応する」何たることか、と。

お わ り に

ペルクゼンにつきしたがって「プラスチック・ワード」と、その多面的な作用と問題点について考察してきたが、最後に読後評を記しておこう。

[言語の歴史：ラテン語・ロマンス語・国語・プラスチック語]

まず、ヨーロッパのことばの歴史を概観しておこう。

インド・ヨーロッパ語の遺産の一部をなすラテン語は、ローマをふくめたその南東部一

帯のラティウムと呼ばれていた地域で話されていたことばであり、話し手がこれを「ラテン語」とよんだことに由来する。

このことばは、紀元前7世紀末から6世紀初頭に存在していたことが公式に確認されている。紀元前3世紀頃には支配的地域語としての地位を手にいれた。しかし、このラテン語自体もまた実用言語としての通用力をうしなっていくのであるが、ロマンス諸語という遺産を残し、ここにフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語が輩出することになった。

ラテン語の歴史にとって重要なのは、ギリシャ人との位置関係であった。ラテン語とギリシャ語の歴史は創造的拮抗の歴史であり、ギリシャ文化がいかに威信があり、模範的であったとしても、ローマは文化的影響を軍事的・政治的制覇とけっして混同しなかった。ギリシャ語が文明語かつ文化語であるという地位を占めていたゆえに、ローマで市民権を獲得していった。こうしてラテン語はさまざまな接触をかさねて自らの固有の構造を強化しながら、ラテン語の言語体系の基本構造をおびやかすことなく、同化できるものは何でも組み込むことを辞さなかった。ここにラテン語の実用主義がみとれる。

そもそも、ラテン語の語彙は農民生活の事実の例示であり、その具体的な姿がありありとうかがわれる。文学生活でさえ農耕活動との類似をしめしている。たとえば、「読む」とは「採取すること」であり、「日常会話」は「種を蒔くこと」ないしは「連なること」に結びついている⁴⁾。

話しことばと書きことばのあいだのバランスがとれていた古典期を経て、アウグストゥスの世紀（紀元前43～紀元後14年）になると、人為的な技巧文学散文がみられるようになり、口語ラテン語と文語ラテン語の最初の深刻な乖離が生じる。さらに蛮族の猛攻勢、とりわけゲルマン民族の大移動によってローマ帝国の基盤がゆらぎはじめる。しかし、この危機に直面してラテン語の盾となったのがキリスト教の伝播であり、とりもなおさず、この新宗教がラテン語の再生をもたらすことになる。

「初めにことばがあった……」とすることばの宗教キリスト教は普遍的使命をおびて新しい理念をひろめるため、下層民をはじめすべての人びとに呼びかけた。この宗教的必要性から、キリスト教はラテン語に新語法やギリシャ語からの借用語などさまざまな造語をくわえて豊かにしていった。その一方で聖職者の言語は、かれらの教えるキリスト教ラテン語に学者的性格を付与していく。これは文語ラテン語とは異なるものの、民衆語との格差を拡大するようになる。こうしたラテン語の多様化とともにロマンス諸語への大変容の兆しが見えはじめる。

ラテン語が消滅した公式確認は紀元後813年とされている。この時期にアルル、マインツ、ランスなどで、とりわけトゥールの公会議で「キリスト教の説教をラテン語ではな

く、ローマニアあるいはゲルマニアの俗語で行うべし」と規定された。以後、学識者のラテン語、つまり書きことばとしての文語ラテン語と、平俗なラテン語である口語ラテン語とのあいだに、文体の差異ではなく言語としての差異（二つの単位体）が明確に認められるようになっていく。この口語ラテン語こそが民衆のことばであり、後のロマンス諸語の母体になるものであった⁹⁾。

新しい信仰のありようが「土着語」を強力な共通語へと発展させる決定的な要因となり、ついで宗教に代って政治の力がロマンス諸語を「国語」へと囲い込んでいくことになる。

〔近代国民国家と言語帝国主義〕

ダンテ（1265－1321）は小説をまずラテン語で書き、それをイタリアの一地域の言語に翻訳したことによって、近代イタリア語（国語）の生みの親になったという。また、ルター（1483－1546）による聖書の翻訳は標準ドイツ語の生成となって共通言語の規範となった。しかし共通語が拡張するか否かは政治的な問題に左右された。神聖ローマ帝国では多数の領邦国家に分裂し国家的基盤が弱かったゆえに『国語』という共通語の形成は遅れた。デカルト（1596－1650）やスピノザ（1632－1677）はまだラテン語で著述したが、カント（1724－1804）以降は自国語のドイツ語で著述している。啓蒙思想家は各自の『国語』で思想を書き著わしている。宗教に代って政治が言語の拡張と規範を左右する時代となった。

近代国民国家の形成とともに18世紀に発見された「発展（Entwicklung）」という概念が「科学」の重要概念になったことで、あたらしい法則がうみ出されていく。ペルクゼンのいう国民国家の「俗語」が、「科学」の洗礼をうけてプラスチック・ワードをうみ出す。国民国家と国語と科学が一体となって発展・進歩の概念を駆り立てた啓蒙の近代の到来をもって、科学（Wissenschaft）はラテン語を捨て去り、各国の俗語を使いはじめ、ここに概念の変質が生じ、この変質した概念が日常言語の世界に戻されると、日常の自明性となって政治的、社会的な概念変化を引きおこすこととなる。こうして生活世界の経験の堆積が言語からうばわれてしまい、歴史なきプラスチック・ワードによって生活世界が植民地化された。

生活世界で経験をかさねる人間のことばが失われることは、思考を具体化する主体の言語がうばわれたことである。それゆえプラスチック・ワードで侵食された言語は、思考・認識をも侵食し、主体なき状況変化を展開することになる。そこに、独裁者を生み出す素地が用意されている。「プラスチック・ワード」にみられる言語の同質化が、全体主義への道をひらいていったナチズムという歴史的経験をわたしたちはすでにもっている。

しかし、ことばの変化をもたらす歴史的・社会的実態の変化、そこで形成される新たな

現実をどう解釈し表現するのか、文化と歴史はどんなことばで形成されていくのか、多様な歴史的雑種性のなかであって、伸縮する生きたことばの可能性が問われている。

インド・ヨーロッパ語から派生したラテン語、ラテン語から分岐したロマンス諸語、そして宗教がもたらした「共通語」を近代国民国家は政治の力で「国語」へと囲い込んだ。現代のプラスチック・ワードの歴史は、さまざまな「言語帝国主義」を生み出してきた。とくに、近代国民国家が「ことば」、 「国語」の同一性を基盤として成立してきたのであるかぎり、すでに国民国家の成立時から「言語帝国主義」のとば口に立っていたのである。

〔言語社会学から歴史社会学へ〕

さらにベルクゼンは、現代社会に横行している「プラスチック・ワード」は、動詞を自動詞化することによって行為主体を見えなくし、歴史を自然化してしまっていると指摘している。しかしこの現象は日本語にあっては本来的な特徴であった。今日でも日本語の「主語」なき文章の横行は多方面で指摘されている。

本書の最後に、エーファ・オトマー（福岡大学人文学部講師）が「日本語版に寄せて」を書いている。そこで次のようにのべている。

「日本は長きにわたってプラスチック・ワードの威力に抵抗の姿勢をしめしてきた。かつて日本では、ひとつひとつの外来語にたいして適切な日本語を見つけだそうと苦心惨憺してきた。やむをえないときには、Philosophieを表わす「哲学」のように造語をつくることもあったし、Internationalisierungを表わす「国際化」のように、既存の日本語の単語から複合語をつくることも多かった。……Entwicklungは、「発展」にも「発達」にも「発育」にもなった。日本語はコンテクストにあわせて対応する言葉を選択するようにふみとどまり、developmentという国際的なプラスチック・ワードの要求をはねつけてきたのである。また日本語ではドイツ語より、プラスチック・ワードが日常言語を手の内に握るまでに時間がかかったのは、日本語の抽象語はふつう漢字によって具体化されるため、それによってある程度は感覚的に経験しうる水準を手にいれることができたためである。しかし、いまや時代は変わった。日本も国際的になり、グローバルなプラスチック・ワードの命令に従うようになった。そこで翻訳者は、固有言語の歴史に根付くことのない空虚な音声にとどまっているカタカナ語に助けを求めた。」

上に述べたような翻訳の経緯が、日本でのプラスチック・ワード化を遅延させた理由として挙げている。しかし、本書の翻訳者である糟谷啓介は、漢字熟語こそプラスチック・

ワードに当てはまるとみている。西洋語の翻訳語である明治以降の漢語は「カセット効果」を發揮することで、ひとびとを魅了してやまなかった。「社会」や「恋愛」が、「システム」や「コミュニケーション」のようなプラスチック・ワードではないという保証はどこにもない、と指摘している。

さらにオトマーは、「たとえば identity は、翻訳者泣かせの言葉のひとつである。「自己同一性」という造語をもってしても意味が通じない。日本語には「アイデンティティ」という言葉にそれなりのコノテーションを授けられるような概念は存在しない。」と指摘している。つまり「アイデンティティ」の翻訳語がない。いまやこの片仮名の「アイデンティティ」ということばが翻訳者泣かせとなっているという。それは実体を欠いているからだという。

「アイデンティティ」は、主体性を措定する近代特有の意味をもつことばである。しかし、「和」を重んじる主体性の希薄な日本の歴史的背景と文化のもとで、これに該当することばは成り立ちにくい。アイデンティティということばは、個としての主体が明確であるところで生まれる。したがって、存在ではなく能動性をともなうことばであり、自動詞ではなく他動詞と結びつく。「個」の措定のしかたが根本的にことなっていたために、近代日本の「自我」の目覚めが自意識にとどまるのにたいし、社会性を措定することによって生じる「主体」はアイデンティティを外の世界に求め行動する。

長く続いた「主体」の歴史的空白が翻訳者を困惑させている。

日本語が、主体にかかわるこの「アイデンティティ」ということばを受容する過程をみることは、意味論の実態を構成している社会と歴史の変化をみることであろう。評者にとっては、言語社会学から歴史社会学へ、「意味論」から社会的「実態」の歴史を究明することが課題となる。

註

- 1) 田村雲供著「ドイツ・ヴァイマル共和国における「性・結婚相談所」の成立と消滅——「性」の民主化へのプロセス——」『社会科学 第79号』同志社大学人文科学研究所, 2007年10月, 1-30.
- 2) ミシェル・フーコー著, 渡辺守章訳『性の歴史I 知への意志』新潮社, 1986, 197-199.
- 3) バーバラ・ドゥーデン著, 田村雲供訳『胎児へのまなざし——生命イデオロギーを読み解く』阿吽社, 1993, 139-140. ドゥーデンは、見えない胎児が視覚化されていく経緯を、触覚から視覚化への歴史として意味論的に解いている。
- 4) ジャクリース・ダンジェル著, 遠山一郎, 高田大介訳『ラテン語の歴史』白水社, 2001, 13-66.
- 5) 風間喜代三著, 『ラテン語・その形と心』三省堂, 2005, 3-19.